

## 闇のクラス王

四月二十四日（月曜日）

新学期が始まってもう3週間がたった。ゴールデンウィークに入るまで、あと5日だ。この5日で、すべてが決まる。いよいよ今年の「闇のクラス王」が決まるのだ。

柘植（つげ）真一は、もう一度こっそりと手帳を開いた。その手帳には、5ページにわたって真一のクラス全員の名前が、インシヤルで書いてある。その横にびっしりと並んでいる暗号のような記号や文字。これが、真一の秘密メモだった。今年の「闇のクラス王」選びに備えて真一は、こつこつデータを収集してきた。その成果がこれだった。

表舞台の委員長は、新学期早々にあつた選挙で、ガリ勉の本島あすかに決まっていた。しかし、そんなものは誰がなるうと問題ではない。この田原（たばる）西小学校では、本当にクラスを動かすのは昔から「闇のクラス王」に決まっていた。宿題やテストの範囲、席順、遠足の行き先などクラスにとって重要な事項は先生といえどもこっそり「闇のクラス王」に相談して協力を仰ぐ。もし「闇のクラス王」の機嫌をそこねれば、クラス全員が、先生にそつばを向くことだつて十分にありうるからだ。以前にその闇の掟（おきて）を知らない新任の先生が、勝手にクラス・レクレーションの日時を変更して「闇のクラス王」の怒りを買ひ、翌日から3日間、クラス全員が一斉に学校を欠席してしまい、大問題になったことがあるそうだ。その新任の先生は何が起こったかわけが分からず、最後には「闇のクラス王」に土下座して許しを乞（こ）い、ノイローゼ寸前まで追い込まれたそうだ。それほど「闇のクラス王」の権力は絶大だった。他にも、「彼女いない歴20年」の、冴えない男性教師が、1年間ひたすら「闇のクラス王」の機嫌を取り結んだ結果、1年後には絶世の美人に言い寄られて、結婚できるようになったなど、「闇のクラス王」の謎の力をめぐっては、色々な伝説が言い伝えられていた。

しかも今年は、真一たちは小学校の最上級生として、6月の運動会では全校の応援団を組織することになっていた。「闇のクラス王」にさえなれば、どの学年のどのクラスと同じ団になるかまで自由に決定できる。

真一は、5年の奥村ユキと同じ応援団で、発声の練習をしたり、夕方遅くまでマスコットの製作をしている自分を思わず想像した。最初は奥ゆかしく秘密にしておくが、ある時ふとしたきっかけで実は全応援団を影で操る「闇のクラス王」が真一であることが奥村ユキに分かる。その時の奥村ユキの、あこがれと尊敬に満ちたまなざし。やがてその尊敬の念が淡い恋心に変わる……。そうして運動会も終わったグラウンドで、奥村ユキが、恥ずかしそうに真一に声をかける。美しい夕日に染まったグラウンドに他に人気はなく、いつのまにか二人っきりだ。

「あの、すいません。ちょっと話があるんですが・・・」

「ああ、たしか奥村さんとかいう名前の人だね。何か用？」

「これ、返事を下さい」

ユキは、それだけ言うのが精一杯のようだ。さっと小さな封筒を渡し、もう真っ赤になって運動場の向こうの方に駆け去っていく。思いがけないことに、その封筒をひらひらさせながらユキの後ろ姿を目で追いかける真一・・・。

「いたい、痛いよ、シンちゃん。シンちゃんが、手帳を振るもんだから、さっきからそれが何度も僕に当たってるよ」

真一が、ふっと我にかえると、ケンタが口をとがらしていた。真一は、あわてて手帳を引っ込めた。どうやらしばらくの間、空想の世界に浸(ひた)っていたらしい。

「シンちゃん。何をでれでれしてるんだい。その手帳、何か面白いことでも書いてあるの？」  
ケンタが、無遠慮に手帳をのぞきこもつとした。

「ごほん、おほんおほん。ああ、いや。何でもない、何でもないよ。今日お母さんに買い物頼まれててね。それを確認してたんだ。」

「本当かい？」

ケンタは、何か探るような、りすのような目つきで、真一と手帳を見ている。ケンタはバカだが、それだけに妙にカンが鋭いところがある。

あぶない、あぶない。何かで注意をそらさなければいけない。

「そっだ、ケンタ君。帰りにマルハNSTOAに行かないかい。あそこのバナナシュークリームおこるよ。」

「えっ、おこってくれるの？ 行くよ行くよ。あそこのシュークリームうまいもんね。」  
ケンタは早くも上機嫌だ。

「ベンx、オカ、友 ゆづ。A」  
というのがケンタの項に書いてあるメモ書きだ。「ベンx」は、勉強はまるでだめ、「オカ」はお菓子の誘惑にはすぐつられる、「友 ゆづ」は仲のいい友達は「野口ゆうや」だという暗号だった。

そしてそのメモの一番右の「A」は、今度の「闇のクラス王」選びでまず間違はなく真一に投票するということを意味していた。これまで何度もお菓子で買収してすでにランクAなのに、この上にまたバナナシュークリームをおごらなければいけないのは痛い出費だ。しかし言ってしまったものは仕方ない。真一は内心舌打ちしながら、もう一度メモ張の身をこっそり点検した。クラス36人中Aランクがケンタ他16人、これは間違いなく真一に投票する固定層だ。一方で絶対に真一に入れないC組も13人いる。内訳は、委員長の本島あすかに入れるがちがちの「まじめ勉強組」が6人、幼稚園の時からボデイビルをやっている

藤波正平（しょうへい）に入れる「筋肉マッチョ組」が3人。それに何が楽しいのか、いつも暗い表情をして四人一緒にいる「意味不明女子四人組」が4人だ。そして浮動票のBランクが7人。これで36人になる。

仮に対抗馬の「まじめ勉強組」が残された五日間で懸命の巻き返しをはかって、浮動票の7人を全部とり込んだとしても13票にしかならない。「筋肉マッチョ組」の3人は昼休みになると、待ってましたとばかりにグラウンドに出て腕立てふせ100回に、鉄棒懸垂（けんすい）50回のメニューを大急ぎでこなしく何かというと、すぐに海水パンツ一枚になって、筋肉ポーズを見せびらかす変態集団だ。女の子たちは、気味悪がって近寄ろうともしない。こいつらは、問題外だ。

よっぽどのが起こらない限り、真一の勝利は疑いようもなかった。あとは残された五日間で、浮動票組を、1票でも多く自分の方にとり込んで、さらに安全勝ちを目指すだけだ。楽勝だ。真一は満足気（まんぞくげ）にうなずいた。

そうだ、秋には、文化祭のポスター作りがある。ポスター製作係には、クラス一の美少女の島内ケイコがなることは間違いなかった。今は浮動票組の島内ケイコだが、真一が「闇のクラス王」になればその日から、真一を見る島内ケイコの目つきが、一変するだろう。

夕方もう誰もいなくなった教室で、せつせとポスター作りに取り組むケイコ。そこにたまたま真一が通りかかる。

「おや、島内さん。遅くまでポスター作りなの。偉いね。」

「ええ」

ケイコは、恥ずかしそうにうつむく。「闇のクラス王」に名指しで呼んでもらえた感激で、心はふるえんばかりだ。

「おや、この黒いの、虫かな？。絵に虫がついてるよ。」

真一が絵に手を伸ばす。とっさに、その虫を取ろうとしたケイコの手と、真一の手とが思わず重なる。ケイコの手はびくりと震えるが、引っ込めようとはしない。二人の間に沈黙が流れる……。

「気持ち悪いよ。シンちゃん。手なんか握って……。放してくれよ。」

ケンタの甲高い声に、真一は思わず我に返った。どうやらまたしばらく空想の世界に浸っていたらしい。真一はあわてて手を引っ込めた。

「いや、悪い悪い。ちょっとよろけてしまったんだ。ごめんごめん。」

ケンタは、苦しい言い訳をする真一を、気味悪そうににらんだ。

「本當かい、シンちゃん。それに何だか顔が赤いよ。熱でもあるんじゃないのかい？」

「いや、何でもない、何でもない。本當に何でもないよ。」

真一は、つとめて平静を装った。あぶないあぶない。「闇のクラス王」が決定するまでは、こんなところでつまずくわけにはいかない。何しろよっぽどのことがない限り勝利は目前なのだ。

と、その時だった。ケンタが突然話題を変えた。

「ところでシンちゃん、今日の転校生ってどんな奴だろうね？」

転校生？ しまった！。それだけは考えに入れてなかった。真一の心に、いやな予感がよぎった。

「いや、知らないけど、何て名前なんだい？」

「三浦シュウタローかユータローか、何かそんな名前だったよ。女子が芸能人みたいな名前だって騒いでたよ。」

真一の顔からみるみるうちに血の気が引いた。くそっ、この微妙な時期に余計なことを！ 芸能人のような名前で、芸能人のようにかっこいい男だったらどうなる？ 女の子なんかは、かっこいい男に弱い。真一は、このクラスでは、まあまあかっこいい方だった。何より股下60cmという足の長さは、クラス一を誇っていた。Aランクの16人の中には、真一のかっこよさにひかれる女の子が、5人はいた。ただ、この手の女の子は、軽薄なのが欠点だ。新たに芸能人のようなかっこいい男が出現すれば、あっという間にそちらに乗りかえるだろう。真一の口の中は、からからになった。ま、まずい。これまでの努力がすべて水の泡だ！

その時、廊下の方から先生の足音が聞こえてきた。あっという間もなく、教室の戸が開いた。先生のすぐ後ろにだれかが立っている。

その転校生に違いなかった。クラス中のみんなが、そちらの方を一斉に見た……。

2

そこには、もうちょっとで地面に届くかというぐらい長い顔をした、いかにも間抜けそうな男が立っていた。

「三浦 リュウタロウ です。」

その転校生が、間延(まの)びした声でそう名乗る頃には、クラスの者は、あわてて下を向いて笑いを隠したり、急いで教科書を開いたりして無関心を装(よそお)おうとしていた。

「ぎゃははは、ぎゃはぎゃは、うはははは。」

無遠慮な笑い声をあげたのは、ケンタだった。

「シンちゃん、見ろよ見ろよ。あいつのあの顔。それで名前が三浦リュウタロウだって。うぶぶ。三浦タメゴローのような顔しちゃってさ。それに足、短か過ぎだよ。シンちゃんの半分もないんじゃない？ ぎゃははははは。」

ケンタにつられて、それまで顔を伏せていた女子の数人も、思わず吹き出した。かっこいい男が大好きな深堀マユミなどは、もう耐え切れないとばかりに、机をたたいて笑い転げている。

「だめだよ。そんなこと言っちゃ。」

真一は、笑いを必死になってこらえてそう言った。ほっとしたのと同時に、三浦のあまりの間抜け顔に思わず吹き出しそうになったが、ここで笑ってはいけない。「闇のクラス王」は、いつも沈着冷静（ちんちゃくれいせい）でなければならぬのだ。そしていつもどんな人にも、思いやりの心をもって接さなければならなかった。

しかしその真一の余裕（よゆう）は、つぎの先生の一言で、あっというまに消し飛んだ。

「ええ、三浦君はあの明倫（めいりん）小学校から転校してきました。みんな仲良くしてあげてください。」

明倫小学校！……。その名前にクラス中の空気が、一瞬凍（こお）りついた。がり勉組の本島あすかですえ、教科書から目を離し、眼鏡をかけ直して、三浦リュウタロウをまじまじと見ている。

私立の明倫小学校は、普通の公立の小学校と違い、エリート教育を徹底していることで名前がとどろいていた。小学校の高学年になれば、能力別にクラスを編成し、中には難しい中学の数学の問題なんかも、すらすらと解ける生徒さえいるという。本島あすかが、色めきたつのも無理はなかった。

席についたリュウタロウに、本島あすが、早速（さつそく）たずねた。

「三浦君、前の小学校では何組にいたの？」

「うーん、いつもA組だよ。」

リュウタロウが事もなげに答えた。

ま、まずい。

真一の顔からまた血の気が引いた。

真一は、本島あすかにはかなわないまでも、このクラスでは、2番か3番の成績を維持していた。勉強でも優等生であることが「闇のクラス王」選に有利に働いている。

それがこの馬鹿面（ぶら）をしたリュウタロウが、なんとあの明倫小学校でA組だと言う！そんな実力なら、このクラスでは、あっさりトップに立つに違いない。あの軽薄女の深堀マユミですえ、さっきまで笑い転げていたことなど、もう忘れてしまったかのように、リュウタロウの方をちらちら見ている。どうやら興味津々（しんしん）の様子で、他の女の子とひそひそ話を始めていた。

真一の肌が、恐怖で粟（あわ）立った。深堀マユミは、かっこいい男の次にインテリが大好きだ。これで深堀マユミが、リュウタロウに乗りかえるとすると、それにつられて2人や3人はそれに同調する者がでてくるだろう。これはまずい。まず過ぎる展開だ！。真一の口

の中は、からからになった。しかし待てよ。落ちつけ落ちつけ。冷静になって、もう一度考えてみよう。

仮に深堀マユミたち軽薄グループが、リュウタロウの側についたとしても、それで真一の票が減るのは、わずかに3票か、多くても4票に過ぎない。他の人間は、そんなに簡単に真一を裏切るようなことはしない。真一は大急ぎでクラスのメンバーの名前をおさらいした。まずケンタ、野口ゆうや他2人の男子。こいつらはこれまで何度もお菓子で買収済みだし、宿題も時々手伝ってやっている。真一に入れることは99%確実だ。それに藤村あいと池田くるみの厚化粧（あつげしよう）二人組も大丈夫だろう。この2人は、小学生のくせに厚化粧が大好きで、体育やクラスレクリエーションの時間でさえ、化粧が取れるからと言って、参加しない。そこにいつも真一だけが、やさしいことばをかけているのだ。勉強ができるからと言って、リュウタロウの方に寝返（ねがえ）るといふことは考えられなかった。

それ以外に、去年から真一と同じクラスだった者が5人いる。彼らは、今年真一が「闇のクラス王」にさえなれば自分たちの嫌いな「漢字の書き取り」の宿題が大幅に減ることや、先生に圧力をかけて月に2回は、給食の時にアイスクリームやプリンなどの、デザートを付けるつもりだということを、去年からいやというほど聞かされている。したがって真一を支持することは、ほぼ間違いなかった。これで真一自身の票を入れれば11票から12票は固いだろう。当初（とうしょ）の思惑（おもわく）よりは減るものの、それでもまだ本島あすかのがり勉強よりは上回っている……はずだ。

真一は、本島あすかの方を見た。本島あすかは、相変わらずリュウタロウを見つめたまま、何事かをじっと考え込んでいる。何だ、なんだこれは？ 勉強以外に興味がないはずの本島あすかが考えることは何だろう？ 今更（いまさら）何を考えることがあるだろう？

あつ。

真一の頭に何かがひらめいた。本島あすかは「闇のクラス王」選びから降（お）りるつもりだ！

降りて、リュウタロウの支持に回る。そうだ、それに違いない。

本島あすかは、もともと「闇のクラス王」には、さほどの興味を持っていない。ただ勉強優先（ゆうせん）のクラスにさえなればいいと思っている。「闇のクラス王」になれば、権力もあるかわりに色々わずらわしいことも多い。そこでこの際、秀才のリュウタロウをかつぎ、リュウタロウに恩を売る。そうすれば個人的にリュウタロウから勉強を習ったりも出来るだろうし、明倫小学校をめぐる色んな情報も入手（ゆうしゅ）出来る。そうだ、それに違いない。

そうなる……真一の頭はめまぐるしく回転した。

リュウタロウに入る票は、本島あすかのがり勉強が6票、深堀マユミ以下の軽薄組が3票または4票。もちろん真一の優位（ゆうい）は動かないもののその差は極（きわ）めてわずか



味にもこっくりさんをやっているのだ。暗い。どこまでも暗い四人組だ！

「まあ、座んなよ。」

一人の女の子が声をかけた。中原ちひろ……。意味不明女子四人組のナンバーツーだ。さつきから黙りこくってトランプを並べている。

「あんた、ハートとスペード。どっちが好き？」

「えっ？」

真一の頭がめまぐるしく回転した。この質問は何だ？ 何のためだ？

普通、女の子はハートが好きだ。ここは、ハートが好きだと言っておくのが無難（ぶなん）だろうか？ いやいや、そう言ったらかえって変かもしれない。ここは男の子らしくスペードが好きだと言った方がいいだろう。いや、それだと駄目だ。この四人はただでさえクラスの中で孤立（こりつ）している。自分たちの気持ちがかかる男の子がいればそれだけで感激するはずだ。

「ハートが好きだけど……。」

真一の言葉に、他の女の子がくすつと笑ったようだった。しまった。

やっぱりスピードと言った方がよかっただろうか？ 真一の脇を冷や汗が流れた。

しかし中原ちひろは、聞こえたのか聞こえないのか、また黙々とトランプを並べている。何だ、なんだ？ 何のための質問だったんだ。意味不明だ。真一は頭が痛くなった。

「あんた、ピーナッツ好き？」

しばらくして別の女の子が聞いた。真一の方をじっと見つめて、ピーナッツを食べている。多分そのピーナッツをくれるつもりなのだろう。

「ああ、好きだよ。」

「ふーん、私、もんじゃ焼きが好きだよ。」

それっきりその女の子は、そっぽを向いてピーナッツを口に入れている。

「……。」

真一の目が、点になった。何だ、なんだ。それなら何のためにそんなことを聞くんだ？ 謎だ。すべてが謎だ。

「ところで困ったことになったね。」

ボスの里見京子が、おもむろに口を開いた。

「三浦リュウタロウなんて、とんだ邪魔（じゃま）が入ってきちゃって……。すっかり予定が狂ってしまっわ。」

そうだ、そうだ。そのとおりだ。予定が狂ってしまっんだ。よく分かってくれてるじゃないか。真一は心の中で猛然（もっせん）と相槌（あいづち）を打った。

「……はひとつ、協力しなきゃね。」

そつだそつだ。そのとおりだ。何でも分かつてるじゃないか。あんたたちが協力さえしてくれば、俺にとってのパラダイスが実現するんだ。

「何しろ、夏休みにこれまで誰もが待ち望んでいた『大こっくりさん大会』をやるためだもんね。もちろん、柘植（つげ）君、協力してくれるでしょう？」

「????? えっ、協力って何のことだい？」

「だから、柘植君の持っている票を、私たちに回すのよ。それで闇のクラス王は、私のものだよ。そつすれば夏のキャンプの夜は、夢の大こっくりさん大会よ。少年の森キャンプ場に、こっくりさん呼び出す呪文（じゅもん）が3時間にわたって響き渡るのよ。そんなの日本で始めてのことだよ。ああ、待ち遠しいわ。」

早くも里見京子の目がうるんで、うつとりと遠くを見ている。げげげっ、こいつら何を勘違いしているんだ。大こっくりさん大会？ そんなもの、誰が望むもんか。

それどころか、キャンプの夜は、キャンプファイヤーを囲んで、フォークダンス大会をやるんだ。それに決まってるんだぞ。真一の脳裏（のうり）に、これまで何度も思い描いた計画が浮かんだ。

キャンプファイヤーには、もちろん隣のクラスの浅川みゆきも参加する。そして最後の曲が終わる時に、俺と浅川みゆきが、当たるようにしておくんだ。

夜空を焦がすキャンプファイアの赤い炎に、夏の夜風が心地よい。突然終わった音楽に、それまでぎこちなくなっていた二人の手が、そつと離される。それでも二人の心は、これまでの余韻（よいん）を楽しむかのように、何かこのまま別れ難（がた）いものを感じている。

「みゆきさんだったよね、向こうでジュースでも飲もうか」

真一が、さりげなくもちかける。もちろん「闇のクラス王」の言うことばの魔力に、浅川みゆきが、抗（あらが）えるはずもない。

「そつね、私ものが渴いたわ」

そして二人はみんなの輪から離れ、湖の方へと向う。

湖に向うにつれ、人影がなくなる……。

完璧（かんぺき）だ！ 完璧なシチュエーションだ。それを、大こっくりさん大会なんて、わけの分からないものに変えるなんて絶対に出来ない。

しかし、そんなことは、おくびにも出せなかった。何とかこいつらを、こちらに協力させなければ……。真一は知恵を振りしぼった。

「どうだろう。闇のクラス王って、やってみると、何だかんだと、ムダな時間を取られることも多いんだ。何も君たちのように、素晴らしい人たちがわざわざそんなものになる必要もないんじゃないかな。そんなわずらわしいことは、代わりにやる人間は、他にもいると思っ



真一は、渾身（こんしん）の力をこめて、こっくりさんの杯を、押し戻した。「さ」に向つていた杯が、ぶるぶる震えながら少しずつ方向を変え、「つ」の文字の方に向つた。だが杯は無情にもすべに「つ」を行き過ぎようとする。真一は今度は懸命に杯を押しとどめた。

「つ」にもどね。「つ」にもどるんだ。真一は、歯を食いしばって杯を押し戻した。

杯がようやく「つ」の文字のところまで戻ってきた。そのまま小刻（こぎざ）みに震えている。真一はまた全身の力をこめて杯を固定した。やった！ 何とか「つ」の字のところまで止まった！

真一の額からは、脂汗（あぶらあせ）が流れた。

杯が再びがたがた揺れ始め、また猛烈な勢いで動き出した。まるで怒っているかのように「さ」の字の方に向い出した。

ま、まずい。また里見の「さ」だ。せつかく「つ」の字で止まったんだ。つぎは「け」だ。柘植の「け」だ。早く早く「け」を探すんだ。どこだ、どこだ？ 「け」はどこだ？

真一は血走った目で「け」を探した。「け」の字は右上の方にあった。

真一は、そちらに向つて、あらん限りの力を振り絞った。杯がじくじく運動を繰り返しながら少しずつ右上の方へ押し上げられた。かろうじて「け」の文字の所に来た。ここだ。ここで止まれば俺の勝ちだ。真一は力一杯、杯を押しとどめた。杯が「け」の上でふらふらしながらわずか1、2秒止まったように見えた。やった！ 俺の勝ちだ。ほっとした真一の気がゆるんだ。その瞬間に思わず……「屁（へ）」が出てしまった。ぷっつ。

三人の間に気まずい沈黙が流れた。

ややあつて、中原ちひろが耐えかねたように笑い出した。

「くっくっく、ひっひっひ。あはあは、あはははは。」

中原ちひろの指が杯から離れ、同時に腹を抱えて笑い出した。こっくりさんの最中に「へ」が出るなんて前代未聞（ぜんだいみもん）のことなのだろう。

やがてさすがの里見京子も吹き出した。こちらも指を離して笑い転げている。

真一は、自分でも情けないような、恥ずかしいような、笑ってしまいたいような複雑な気持ちになった。

だが真一は、つとめて平静を装って宣言した。

「ごほん、おほん、おほん。えーと。最初、「つ」、次に「け」。どうやらこっくりさんはぼくが闇のクラス王になるのに賛成みたいだね。」

「ええ、そうね。」

ややあつて、落ち着きを取戻した里見京子が、しぶしぶ同意した。

「私たちの票は、柘植君に入れることにするわ。何しろ、こっくりさんのお告げだからね。」

やった！ これで闇のクラス王は俺のものだ。真一は、心の中で何度も万歳を叫んだ。

「ところで柘植君。まさかこっくりさんをだますようなこと、していないでしょうね？」

お堂から帰ろうとする真一に、里見京子が、何か考えごとをするかのように聞いた。

「えっ、もちろんそんなことないよ。どうしてそんなこと聞くんない？」

「ううん、それならいいけど・・・。こっくりさんをだましたら、ひどいあたりがあるってもちろん知ってるよね？ こっくりさんって、みんな軽く考えてるけど、本当は神様なんだからね。」

「うん。もちろん知ってるよ。」

真一の声がかすかに震えた。「ひどいあたり」ってどんなんだろう？ そんなこと考えたこともなかった・・・。

まあいい。とにかくこれで俺の「闇のクラス王」は決まりだ。真一はお堂を出た。境内では、夜風が生暖かかった。その時だった。ふと、真一は、何かの気配を感じて後ろを振り返った。そこには誰もいなかった。気のせいだろうか？ そう言えば、ここ何日間か、時々誰かに見張られているような視線を感じるがあった。まさか、そんな・・・。多分、「闇のクラス王」のことで、神経が過敏になっているのだろう。真一は、頭を振りながら、神社を後にした。

#### 4 四月二十五日（火曜日）

次の日の午前中、本島あすかは、ちらちらと三浦リュウタロウの方を盗み見ていた。三浦は、国語や算数の時間の時にも、新しくもらった教科書を広げたまま、授業を聞くでもなく、長いあごを机の上ののせてぼうとしている。次に見た時にはこっくりこっくり居眠りをしていた。

「やっぱりレベルが違いすぎて面白くないんだわ。」

本島あすかは、ひとりうなずいた。三浦リュウタロウをかついで「闇のクラス王」に仕立て上げる。そしてこのクラスを、勉強中心のクラスにまとめあげる。本島あすかの決心は、固まりつつあった。

今でも、特に男子は、何かあるとすぐに授業中に騒ぎ出す。特にケンタ、ゆうやの劣等生二人組が、ガンだった。この前理科の時間に「水上置換（ちかん）法」の実験をやった時なんかは、もうそれだけで「いつひっひ。チカンだつて。チカン。チカン。」と騒ぎだししばらくは授業にならなかつたぐらいだ。その下品さと不潔さにかけてはまるでゴキブリなみだ。来年、有名な私立中学を受ける本島あすかにとって、目障（ざわり）なことこの上なかつた。ところが、本来なら優等生仲間のはずの柘植真一が、なぜかこの二人を手なずけていた。その理由は、分かりきっていた。「闇のクラス王」を狙っているのだ。

もし柘植真一が「闇のクラス王」になれば、ケンタたちがさらに凶に乗り、クラス全体が落ち着きのない、騒がしい雰囲気になるのは目に見えている。だから柘植真一が「闇のクラス王」になることだけは、絶対に阻止しなければいけない。ただ、これまではその手段がなかった。だがここに三浦が出現した。三浦ほどの秀才なら、本島あすかの言うことがすぐに分かるだろう。その三浦をかついで「闇のクラス王」にする。そして校内のどこかに「残酷！お仕置き部屋」を作らせる。ケンタたちのように授業を邪魔する「キプリ連中は、すぐに「残酷！お仕置き部屋」行きにしてやればいいのだ。逆に、本島あすかに協力的な生徒のために「ゴージャスお菓子部屋」を作る。そこには、いつでもあらゆる種類のお菓子やデザート類をそろえておく。アイスクリーム、バナナパフェ、チョコレートケーキなど何でもだ。そうすれば「ほづびの「ゴージャスお菓子部屋」行きを目当てに、さらに多くの生徒たちが、おとなしい優等生に変身するだろう。アメとムチの両面作戦だ。本島あすかの構想に、ぬかりはなかった。そんな部屋を作ることぐらい、「闇のクラス王」の絶大な権力を使えば、簡単なことだ。

だが問題は、三浦をどうやって説得するかだった。ただでさえレベルの低い小学校の「闇のクラス王」などと言っても、三浦が果たして魅力を感じてくれるかどうか？ それをどうやって納得させるか？ 本島あすかは、それを考えていたのだった。

「三浦君。超能力って信じる？」

本島あすかはそう切り出した。放課後になるのを待って、三浦リュウタロウを屋上に呼び出したのだった。

「えっ、そんなの考えたこともなかったけど、何でだい？」

三浦は相変わらずぼうとした顔のまま答えた。

「これから私が言うことを絶対に人に言わないって約束してくれる？ それでなきゃここから先の話はできないんだけど・・・」

「ああ、いいよ。約束するよ。」

「絶対よ。家の人にも誰にも言ったら駄目よ。実はね。この学校には秘密があるの。」

本島あすかはそこまで言って、三浦リュウタロウの表情をつがった。

三浦リュウタロウが少し身を乗り出している。

「この学校が、歴史だけは古いことは知っているでしょう？」

「うん。」

「それでね。もうずいぶん昔から伝わる秘密のタリスマンがこの学校のどこかにあるのよ。」

「タリスマンって何だい？」

「まあ、呪文の書かれた、ペンダントみたいなものだと思いますわ。それでね。そのタリスマンを持った者には、超能力が身につくよ。」

「超能力？ その超能力って、どんなのだい？」

「何でもそのタリスマンには、古代文字でぎっしりと人を呪うことばが書いてあるらしいの。それでそのタリスマンを握って心の中で念じるでしょう。そうすると、他人を思いどおりにあやつれる力が身につくって言うのよ。」

「そりゃ、すごいね。それでそのタリスマンは、どうやったら手に入れられるんだい？」  
三浦リュウタロウの目が光った。もう一息だ。

「噂ではね。この学校の地下のどこかに、秘密の部屋があるらしいの。その部屋が一番奥に古めかしい大金庫があつて、その中にあるって言うの。」

本島あすかは、これまで学校でささやかれてきた「闇のクラス王」に関する噂話を、三浦リュウタロウの興味を引くように話した。

「秘密の部屋？ それで、そこにはどうやったら入れるんだい？」  
「そこは「闇のクラス王」専用の、貴賓室（きひんしつ）として使われているの。だから「闇

のクラス王」にさえなればその部屋にはいつでも行けるのよ。」  
「闇のクラス王？ 何だい。それは？」

「ああ、三浦君、転校生だからまだ知らなかったわね。まあ、一種のクラスの人気投票のようなものだと思えばいいわ。どう三浦君。そのタリスマン、手に入れたい？ そのために「闇のクラス王」になる気ある？ もしその気があれば手を貸すけど？」

「うん。そりゃもちろんさ。チベット文字で書かれた呪文なんて、それだけで何だか面白そうじゃないか。」

やった。三浦リュウタロウは、大乗り気だ。本島あすかは、内心小躍りした。

「闇のクラス王」選びは、今のところ柘植真一が優勢だけれど、それはこれまでの話だ。だいいち、三浦は、何と言つてもあの明倫小学校出身だ。クラスの中で深堀まゆみなんかは、早くも三浦に興味津々（しんしん）だ。それ以外にも、これからの工作しだい三浦に乗りかえる連中がごろごろいる。

私が本気で動けば、いつでもひっくり返せる！

それには本島あすかは自信があつた。

「じゃ、交渉成立ね。」

本島あすかは、三浦リュウタロウに、手を差し出した。同盟成立の握手だった。だが三浦リュウタロウの、ぶよっとした手の感触が伝わった瞬間、本島あすかの心に、何か電気のようなものが走った。さつきは何気なく聞き流していたものの、本当は心の奥底で感じていた違和感が、はつきり形になってよみがえつたようだった。

「み、三浦君、これからどうするの？ 塾にでも行くの？」

ややあつて本島あすかは、三浦にそう尋ねた。声が震えていないか、自分でも心配だった。

「いや、家にまっすぐ帰るよ。」

「そつだよね。三浦君、この町に引越してきたばっかりだもんね。」

本島あすかは、息を整えるために一呼吸置いて、思いきってことばを続けた。

「たしか三浦君、朝日ニュータウンに住んでるんだよね？」

「えっ、ああ、そつだよ。よく知ってるね。」

「あそこの公園に行ったことあるの。ほら、のっぱのきりんの形をした時計台が、あるでしょう。私、あれが一目で気に入ったのよ。あれが、駅に行く途中に毎日見えるなんてうらやましいわ。」

「ああ、あれね。目立つからね。」

三浦は、のんびりあいづちを打った。予想はしていたものの、本島あすかはその答に思わず血の気が引いた。そしてそのことを、三浦に気付かれないようにするので精一杯だった。

三浦リュウタロウが先に去つてからも、しばらくは本島あすかは、呆然と一人で屋上にたずんでいた。ふと、気づいたら、さつきから足が、がたがた震えている。

朝日公園には「きりんの形をした時計台」なんてない。あるのは「くじらの形をした時計台」だ。それに本島あすかはタリスマンの呪文を「古代文字」としか言わなかった。それなのに、三浦リュウタロウは「チベット文字」だと正確なことを知っていた。そつだ。確かに噂では、そのタリスマンに書かれているのは、チベット文字だということだった。本島あすかは、今

そのことを、はつきり思い出した。

しかし、なぜ？ なぜそのことを三浦が知っているんだろう？ この学校に昔から通っている本島あすかでさえ、忘れてしまっているような事を、なぜ三浦が正確に知っているんだろう？ そつ言えばなぜ三浦は、明倫小学校のようなエリート校からこんな普通の小学校に、わざわざ転校してきたのか？ 考えれば考えるほど謎が深まった。

何か取り返しのつかないことを、仕出かしてしまったのかもしれない。気付いたら脇の下にはじつとりと冷や汗が流れていた。

## 5 四月二十六日（水曜日）

翌日から本島あすかは、「闇のクラス王」逆転に向けて、一気に大攻勢をしかけた。自分の率いる「まじめ勉強組」に号令をかけて、一斉（いつせい）に多数派工作を始めたのだ。休み時間になると、次の時間の宿題をしてこなかった生徒のために、自分たちが作った宿題ノートをせつせと貸します。給食の時間になると、変わりばんこに当番に声をかけ、自分たちが当番を代わってやる……。

「助かるわあ、悪いわね。」

「ありがとう本島さん。恩に着るよ。」  
 教室のあっちこっちでそんな声が飛び交った。今までどちらかと言うと、教室の中でお高く止まっていると思われていた「まじめ勉強組」の献身的な態度は、あつという間に、クラス中の人気を集め始めていた。

この調子だ、この調子だ。明日までの二日間、この調子でみんなの人気を集めることだ。そして、これと思う生徒に、こつそり「ゴージャスお菓子部屋」のことを打ち明ける。そして三浦リュウタロウへの投票を呼びかけるのだ。特に女子の中で、「ゴージャスお菓子部屋」の魅力に抵抗できる者は、そういないだろう。

ふん。私が、本気で動けばこんなもんよ。本島あすかは、心の中でほくそえんだ。すべては計算どおりだ。深堀まゆみら軽薄グループも、案の定、休み時間のたびに、三浦リュウタロウの席に近づいて、あれやこれやとことばを交わしている。

「ねえねえ三浦君。明倫小学校って、お金持ちが多いんでしょう？ 修学旅行にハワイに行くって本当？」

「いや、まさか。ハワイなんて貧乏人の行くところじゃないよ。だってハワイは海が汚いしね。」

「ええっ？ ハワイが、貧乏人の行くところなの？」

「そりゃそうだよ。まあ、去年はモルジブだったし、その前はセブ島だったかな。」

「わあ、すっごーい。」

深堀まゆみたちが、露骨にはしゃいでいる。

「あつ、もちろん夏の修学旅行の話をしてるんだよね？ 冬の研修旅行の話じゃないよね？」

「えっ、明倫って冬にも研修旅行があるのお？ すごーい。それで、冬はどこ行くのお？」

まさか北海道なんて行くんじゃないよね。」

「いやいや、国内は混むからね。去年はスイスのシャモニーだったな。」

「ひえええー！ シャモニー？ すごーい。それってば、すご過ぎだよお！」

「別にすごいことないよ。普通じゃない？」

三浦リュウタロウが、あの間抜けた馬面（うまづら）でこともなげに答えている。

いいぞ、いいぞ。三浦。その調子だ。その調子。その調子で軽薄な女の子たちの人気を、さらえ、さらえ。

あすかは知らん振りしながら、心の中で拍手をおくった。ここまでは、すべて順調だ。だが……。

あすかの心の中に、一点のシミのようなものがよみがえった。

三浦リュウタロウは、本当は何者なんだ？ 何のために、この学校に転校してきたんだ？

「ねえ、三浦君。明倫小学校って、もう中学校の授業をやってるって本当なの？」

一人の女の子がそう聞いていた。

「えっ、ああ。まあね。」

「ねえねえ。だったら聞きたいんだけどね。中学校に入ったら算数にプラスとマイナスが出てくるって本当？」

「ああ。そりゃそうさ。マイナスも出てくるよ。」

「それで、そのマイナスなんだけど。マイナスがプラスになるって本当なの？ そんなのうそだよな？」

「えっ。マイナスがマイナス？ ネーと……。そりゃ、もちろんマイナスさ。マイナスかけマイナスがプラスになるなら、借金かけ借金が、プラスになるってことじゃない。そんなことあるわけないだろう？」

「そりゃ、そうだよな。いくら中学に入ったからって、そんな変な算数、習うわけじゃないよね。ああ、よかった。」

深堀まゆみたちは、大笑いしている。

やっぱりそうだ……。予想していたこととは言え、本島あすかは、思わず頭を抱えた。本島あすかは、通っている塾で、もうとっくに中学校の数学を習っていた。中学では、マイナスかけマイナスはプラスになると習う。もし三浦リュウタロウが、本当に明倫小学校の優等生なら、そんなことを知らないわけがない……。

どう考えても三浦リュウタロウには、おかしいところがあった。しかし、まあいい。まずは多数派工作を成功させておくことだ。そうすればどちらに転んだところで、私の損にはならない。それが昨日一晩かけてたどりついた結論だった。

その日の夜遅く。本島あすかの家を、こっそり訪ねる者があった。「まじめ勉強組」のナンバーツー和田さおりだった。神経質そうな顔を、こわばらせて玄関口に立っている。あすかは、急いでさおりを、二階の自分の部屋にあげた。

「で、どうだった？」

あすかは、さおりが、座るのを待ちきれない様子で聞いた。

「うん、私の通っている塾に、明倫小学校の子がいるって、言ってたでしょう？ 昨日、その子に聞いたらね。確かにA組に、三浦リュウタロウって名前の子は、いるって言うのよ。でも、転校なんて絶対に、してないって。昨日も確かに学校に来てたって言うのよ。」

「えっ、びびりうーとっ」

「それで、その子が、たまたま持っていた三浦リュウタロウの、写真を見せてもらったの……。」

「それで？」

「それがね、まるっきりの別人なのよ。すらっとしたハンサムな子だったわ。」

「……………」

「もうひとつあるの。今日、あすかに言われたとおり、学校を終わってから、三浦リユウタロウの後を尾けたんだけどね。学校を出て最初の曲がり角が、あるでしょう？ あそこを曲がったところで、あつという間に見失ってしまったの……。本当に煙のようになくなってしまってたわ。」

「……………」

「ねえ、あすか。三浦リユウタロウの住所知ってる？」

「朝日ニュータウンのどこかでしょう？」

「そう。朝日町5の18ね。私、念のために職員室で、調べたのよ。ところがね、その住所って、何だと思っ？」

「分からないわ。」

「墓場だったのよ。」

本島あすかは、あまりのことに声も出なかった。二人はしばらく呆然として、お互いの顔を見つめあっていた。

6 四月二十七日（木曜日）

翌日。真一は、本島あすかの大攻勢に焦っていた。「闇のクラス王」選びは、いよいよ明日に迫っていた。だが、このままする本島あすかのペースで進めば、逆転されてしまう。あと一日だ。あと一日で何とかしなければ……。ここを乗り切りさえすれば、「闇のクラス王」として、夢の生活が待っているんだ。

ふと気づいたら、誰かとうんと真一の肩を叩くものがいた。吉田理恵子だった。真一は、無言でうなずくと二人で物陰（ものかげ）に向かった。ここなら誰にも見られない。

「で、何か分かったかい？」

真一は、手短かに聞いた。

「うん。大体ね。」

吉田理恵子の方も短く答えた。理恵子はクラスの中で特に、どの派閥（ははつ）にも属していない。勉強もとりたてでできる方ではなかった。しかしその分、こんな時には頼りになる女の子だった。吉田理恵子は、ふだんは目立たない無口な生徒で、どんな子のグチや他人の陰口（かげぐち）にも辛抱（しんぼう）強く相づちを打って聞く。だからこそ彼女にだけは、誰もが気を許してそれぞれの極秘情報を打ち明けた。真一はこんな時のために、日ごろから吉田理恵子を大事にしていたのだった。

「やっぱり、あすかは、自分自身では「闇のクラス王」にはなるつもりはないみたいよ。」

「えっ、そうなの？」

真一は驚いたふりをした。とつくに知っていることでも、深くうなずいて聞いてやる、それが貴重な情報源を、大事にするコツだった。

「その代わりに、ほら、今度転校してきた三浦リュウタロウって、いるでしょう。彼をけしにかけて「闇のクラス王」にする作戦みたい。」

「へえー、そういうことなの。」

「でも、今のままでは柘植君には勝てないから、逆転するために、あすかに協力的な生徒のために「ゴージャスお菓子部屋」を作っただけで、言いふらしているみたい。」

「ゴージャスお菓子部屋？ 何だい、それは？」

「その部屋では、好きなだけ、好きなお菓子が食べられるのよ。アイスクリームでも、何でも用意するつもりらしいわ。」

なるほど、それは気づかなかった。こちらも、何か対抗手段を考えなくては……真一は無言で相つちを打った。

「でもね、それだけじゃないの。あすかの狙いは、とにかくクラスを、勉強中心にまとめあげることだからね。「ゴージャスお菓子部屋」に行けるのは、あすかに協力した生徒だけ。協力しない生徒は「残酷！お仕置き部屋」に行かされるらしいわ。」

「残酷！ お仕置き部屋？」

「狙われてるのは、ケンタや、ゆうやらしいわ。ふだんから騒いだり、授業を妨害したりする連中ね。もっとも、こちらの計画は極秘も極秘。まだ、誰にも知らされてないみたい。そりゃ、そうよね。そんなことがばれたら、一気に評判が悪くなるからね。」

そうか、そうか。アメとムチの両面作戦か……。本島あすかの考えそつなことだ。特に「ゴージャスお菓子部屋」の魅力には、ころりとなく生徒が多いだろう。早目に情報が入ってよかった……。真一は、胸をなでおろした。だが、それにしても「残酷！ お仕置き部屋」とは、よくも考えたもんだ……。

だが、待てよ。これは、使える。使えるじゃないか。クラスの中でほとんどの子は、勉強に自信があるわけではない。その子たちの恐怖心をあおれば、三浦リュウタロウに傾きだした流れを、もう一度ひっくり返すことができる。そして、こっちは向こうを上回るアイディアで、みんなを釣るんだ。

そうだ、その手だ。向こうが「ゴージャスお菓子部屋」なら、こっちは「スーパーゴージャスお菓子+ゲーム部屋」だ。そこでは誰でも、お菓子も食べれるし、一日中ゲームもやれる……。そうだ。その噂を広めるために、こちらでも宣伝隊を組織すればいいんだ。そして、それを明日の朝からいっせいに宣伝する。宣伝隊のメンバーは誰がいい？ ケンタ、ゆうや、もちろんいいだろう。それに、藤村あいと池田くるみの厚化粧二人組も、大丈夫だろう。他には、だれだ？ 他に誰がいる？

必死になって「秘密メモ」の中身をおそろいする真一に、吉田理恵子がおずおずと聞いた。

「ねえ、柘植君。「闇のクラス王」になったら、私とつきあってくれるって、本当だよな？  
信じてていいよね？」

「えっ、あっ、ああ。もちろんさ。ぼくの気持は、君が一番分かってくれてるはずじゃないか。今さら何を言っただよ。」

真一は、心外だと言わんばかりに、目をいっぱいに見開いて、吉田理恵子を見つめた。

吉田理恵子も、うつすら頬を上気させて、真一を見つめ返している。

へっ、女なんて、俺様にかかること、ちょろいもんだ。真一は心の中でべろっ舌を出した。

X X X X X X X X

次の日、正午きっかり。いよいよ今年の「闇のクラス王」の投票が締め切られた。  
結果は、

柘植真一 18票。

三浦リュウタロウ 16票。

藤波正平 3票。

というものだった。ぎりぎりの接戦をかるうじて制したのは、真一だった。真一は、結果が発表された瞬間、ほっと、深い安堵のため息をついた。何といっても、昨日の放課後、急いで組織した宣伝隊の威力は抜群だった。今朝からの残された数時間で、宣伝隊が噂をまきちらさなければ、どうなっていたか分からない。しかも女子には、本島あすかが「恋愛禁止令」を考えているということまで、噂を流しきった。誰が、誰を好きらしいとか、誰が誰に告白したとかの噂が出た時点で、その噂をした者も、名前があがった者も、どちらも容赦（よっしや）なく「残酷！ お仕置き部屋」に行かされる……。ただでさえ、噂好きの女の子の中には、そのニュースだけで震え上がる者が続出した。そしてその不安にかられて、土壇場（どたんば）で、真一に乗り換えたものも結構いた。もちろん、真っ赤なうそだったが、しかし、まあいい。勝ちも勝ちだ。勝てば官軍だ。へっ、本島あすかごときが、悪知恵なら、俺にかなうもんか！

そして、その2時間後。真一は、本校舎の3階にある給食用のエレベーターの前に立っていた。まわりには誰もいない。それを確かめて真一は、もう一度、さっきメモしたばかりの秘密の暗証番号を、こっそり盗み見た。

「830x」

闇のクラス王にしか知らされない秘密の番号だ。この番号で、普段は給食用のエレベーター

が、地下の貴賓（きひん）室に通じる特別のエレベーターに変わるのだ。真一は、わくわくしながら、秘密の暗証番号を、押した。

「ごおー」。

低い、地響きがするような音がして、小さかった入り口の周辺の壁が、大きく開いた。

そして、貴賓室に通じる大型のエレベーターの扉が、大きく口を開けた。真一は、そのエレベーターに乗りこみ、地下の貴賓室へのボタンを押した。エレベーターの扉が、音もなく閉まり、エレベーターが地下へと降り始めた。いよいよだ。いよいよ、「闇のクラス王」としての生活が始まるんだ。真一は、鼻歌でも歌いたような気分だった。

その貴賓室は、どうなっているんだろう？ 真一は、初めて向かう貴賓室の様子を思い描いた。貴賓室には、真紅（しんく）のじゅうたんが敷き詰められ、豪華なシャンデリアがきらめいているという噂だった。サイドテーブルにはアイスクリームやキャンデーなどのお菓子や飲み物が何でもそろっていて、ふかふかのソファが置いてある。闇のクラス王だからこそ味わえる特権だった。この1年間、その貴賓室を自由に使えることを思うと、真一は自然に起こってくる笑いを抑えることが、出来なかった。貴賓室にはプリンも用意してあるだろうか？ もしそうなら、今日は、ゆっくりプリンでも食べて、好きな音楽でも聴くか……。

そうだ。クラスで、島内ケイコにつく美少女の岸本あゆみは、音楽が好きだ。そのうちこの貴賓室に招待して、二人つきりで音楽を聴くってのはどうだろう。ただでさえ、豪華な雰囲気圧倒された岸本あゆみと二人で、ゆったりとソファに腰をおろして、甘い音楽を聴く。

やがて、岸本あゆみが、そっと真一に語りかける。

「ねえ、柘植君。私、今日何だか、帰りたくないわ。」

真一は、その妄想（もうそう）に、また鼻の穴をふくらませた。

エレベーター、早く着かないかな？ ふと真一は、エレベーターが、なかなか止まらないのに気づいた。おかしい。貴賓室って、そんなに地下深くにあるのだろうか？ いや、そんなはずはない。せいぜい地下2階くらいにあるはずだ。ところが、エレベーターはどこまで行っても、止まらない。それどころか、急激にスピードを増して、どんどん下へと急降下していく。

「……………」

異常を感じた真一は、狂ったようにエレベーターのボタンを押した。だが、そんなことをしてもエレベーターは止まらなかった。ものすごいスピードで下へ下へと向かっていた。何だなんだ、これは！ この調子なら、地の果てまで行ってしまっぞ。地の果て！ そのことはのびびきに真一は、ぞっとした。地の果てって、「地獄」のことじゃないか！

気の遠くなるぐらい、長い時間が経って、ようやくエレベーターがスピードを下げ始め、やがてゆっくりと止まった。ドアが開いて、目の前に薄暗い空間が広がった。あたりには冷

気が立ち込めている。

「こちらへ、」

不気味な声が、真一を中央へと招いた。それこそ地の底から響いてくるような重苦しい声だ。暗がり慣れた目に、声の主が見えた。鍾乳洞（しょうりゅうどう）のような、薄暗い岩場の真ん中にしつらえられた王座のような椅子に、灰色っぽいマントのようなものを頭からかぶった男が座っていた。そのマントの合間から、時折、目だけがピカッと光っているのが見える。

「怖（こわ）がることはない。今日から、もうお前はわれわれの仲間だ。」

マントの主が、ぞっとするような声で宣言した。

「お前の戦い方は、ずっと見ていたぞ。この十年間お前のような奴は、なかなかいなかった。」マントの主が言うと、周囲にいた者どもも、一斉につなずいた。その者どもも、例外なく灰色のマントをかぶり、青白い目や緑色の目だけを、ぴかっぴかっとならして光らせていた。

「お前の、悪だくみ、よこしまな欲望。そして何よりも神をも恐れぬ、魔性（ましよう）の心。われらの一族に迎え入れるのに、十分だ。」

な、何のことだ。われら一族？ 何だ、それは！ 第二こいつらは、何者だ？ 何者なんだ？ 「人間というのは、おろかな生き物でな。せつかく、闇のクラス王」というえさで、誘ってやっても、なかなか「悪」には徹せない……。その点、柘植真一。お前はみごとにわれらの期待に応えてくれた。久しぶりの魔族入りだぞ。名譽に思え。」

魔族！ こいつらは……。こいつらは本物の悪魔だ。何てことだ。真一の顔から血の気が引いた。

そうだ！ 考えてみれば、当然だった。なぜ、「闇のクラス王」が人の心まで左右するよくな絶大な権力を握れるのか？ なぜ、「闇のクラス王」を優遇するために、豪華な貴賓室まで作ってあったのか？ 誰が？ 何のために？ その答が、今、一気に解けた。

「闇のクラス王」は、魔族が人間をおびき寄せるための「えさ」だったのだ。そして、そのえさに食らいついた者の中から、魔族の目になつたものだけが、魔族に引き入れられる……。真一は、悪魔は、人間が墮落（だらく）した姿なのだと、誰かに聞いたことがあったのを、今思い出した。

「おめでとう。柘植真一。きっかり一年後、われら魔族の者が、お前を迎えに地上に行くぞ。そうすれば、お前も栄えある魔族だ。」

魔界の主が、魔族の一人を、あごで示した。その魔族が、真一を見てにやりと笑った。

「……………」

あまりのことに、真一は声も出せずに立ち尽くしていた。マントのすき間から、長い顔の一部が見えた。三浦リュウタロウだった。

そうか、そういうことだったのか。あのままでは、真一の「闇のクラス王」は楽勝だった。そこで、魔族は、対抗馬として三浦リュウタロウを出現させて、真一がどこまで悪魔のような知恵を働かすか、試したのだ。

たたりだ！

「こつくりさんをだましたら、ひどいたたりがあるって知ってるよね？」

里見京子の声が、真一の脳裏によみがえった。

「どうした。真一。来年が待ち遠しいか？ まあ、そう言わずに、今年1年は、ゆつくり最後の地上の生活を楽しむがよい。」闇のクラス王「としての望みどおりの1年をな。ふふふ、はっはっは。」

魔界の主が、くぐもった声で笑った。他の大勢の魔族たちの低い笑い声も、それに呼応するかのようにはじめにこだました。

(完)